

季節風

2016.1.26

No.39

山鹿市立鹿北中学校

文責：郡 一路

山鹿市合同立志式「中学二年」

十八日（月）、市合同立志式が八千代座で行われ、市内六中学校の二年生、四三六人が参加しました。

立志式の司会・運営はすべて各学校の生徒が担当し、本校からは、田中さんが講演会の講師紹介を行いました。

講演では、世界的な心臓外科医で、「神の手」を持つと言われている須磨久善先生が、中学生に熱く語りかけられました。



Creative mind (発想する心) & Challenging spirit (挑む心)

須磨先生は、知識も大切だが、創造する力が何より大切であることや、将来どんな職業についたとしても、なぜ自分がその職業を選んだのかという「原点」をもつこと、どんな仕事でも、発想する心と挑む心が求められる。ゼロから一を生み出す人になってほしい、このメッセージを伝えて下さいました。



須磨久善先生紹介

1950年、兵庫県神戸市生まれ。中学生の時に医学の道を志し、大阪医科大学で学ぶ。卒業後は、虎の門病院、順天堂大学病院に勤め、その後、三井記念病院外科部長、ローマカトリック大学心臓外科教授、葉山ハートセンター院長、心臓血管研究所スーパーバイザーを歴任し、現在は、須磨ハートクリニック院長、順天堂大学客員教授を兼任している。

世界で初めて、胃大網動脈を用いた冠状動脈バイパス手術を成功させ、1996年には、心臓手術ではとても難しいといわれるパチスタ手術に挑み、日本で初めて成功に導いた。心臓手術症例は5000以上にのぼり、「神の手」を持つ、世界一の心臓外科医として世界的に注目されている。

2010年には、日本心臓外科学会栄誉賞を受賞。その功績を描いた特別ドラマ「外科医 須磨久善」が放映された。

須磨先生の生き方や命と向き合う姿は、NHKの「プロジェクトX」や「課外授業—ようこそ先輩」でも紹介され、大きな感動が日本中に広がった。また、テレビドラマ「医龍」、映画「チームパチスタの栄光」の医療監修にも携わっている

自信をつけるためには

あきらめないことと裏切らないことはできる。しかし、それは嘘をつかないことは違う。裏切る自分というのは、約束を守らない自分。医者は患者さんから「先生、私を助けて下さい」とよく言われる。その時、医者は「ベストを尽くします」と約束する。ベストを尽くすというのは、これでもかと百パーセントの努力をすること、しかし、本当にベストを尽くしているのか、それは誰にもわからない、自分だけが知っている。これ以上ない努力の繰り返し。その先にしか「自信」はつかない。

原点をもった人に！

たくさんの子どもに病院見学をしてもうろう。それは「原点」をつくるチャンスだから。あの時、あの場面と巡り会えたから、感動したから、医者になったという「原点」がある人は、壁にぶつかっても乗り越えて前に進むことができる。

しかし、「原点」がない人、誰かから医者になれと言われてただけの人などは、壁にぶつかった時に逃げたり人のせいにする。子どもたちに原点を与えるのは、大人の仕事。自分はこの力になる。なぜそう思ったのか。それを大切にできる人に。

須磨先生は、たくさん質問に丁寧に答えて下さいました。

「一番緊張した手術は」との質問には、胃大網動脈を使った世界初の心臓バイパス手術や日本初のパチスタ手術以上に、経験という引き出しを持たない、初めて行った手術が一番緊張したと語られました。

「手先が器用ですか」との質問には、手先が器用な人はたくさんいる。医者は、このメスが、人の生死を左右する、絶対に失敗できないという極度の緊張状態の中でも、平常心でいられることが大切。器用さ以上に、その精神的な強さと使命感、そして、徹底した準備が求められると語られました。